2022 年度 研究旅行奨励制度　報告書

グリーンツーリズムによる人々の交流や地域資源の活用

24AR049 上野百恵

写真：大分県宇佐市安心院町　筆者撮影

目次

◆　はじめに
研究旅行の目的
期待される成果
研究旅行日程表

◆　1. 安心院町・農泊の 3 日間
1 日目　「百年乃家ときえだ」
2 日目　「舟板昔ばなし」
3 日目　「農村民泊　悠遊」
地域資源と観光

◆　2. グリーンツーリズム・農泊とは
農泊の意味
日本と外国の休暇制度の違い

◆　3.　農村社会と女性

◆　おわりに

◆　参考資料

◆　はじめに

【研究旅行の目的】

今回の旅行の目的は、戦後の西欧社会を発端とし、滞在型余暇活動として日本でも社会的関心が高まっているグリーンツーリズムの多角的な活動や地域資源の活用を調査することである。また、この調査では、現地体験とともに地元の方々のお話を伺った。

私が今回調査対象として選んだのは、日本の農泊(グリーンツーリズム)発祥の地である大分県安心院町(あじむまち)である。安心院町では、「NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会」が中心となって活動を行っている。

今回は NPO 法人の活動を通して①安心院町での農泊、②研修プログラム(講話)、③外国とのつながり（ヨーロッパ研修・外国人観光客）に注目して調査を行った。具体的な調査概要は以下の通りである。

① 特色のある複数の農家に続けて泊まることで、それぞれの農家が、どのような場所でどんな体験を提供しているかを比較しながら調査した。また、農泊による農村の暮らしの体験や人との交流だけでなく、安心院町の地元の食・自然・環境・景観などの地域資源が、地域の中でどのように存在し、観光に活用されているのかについて調査した。

② NPO 法人の方の講話を聴き、安心院町の農泊の歴史や地域資源の活用方法について調査した。

③ 外国への研修、訪日外国人に向けての取り組み、また中高生を対象とした修学旅行（パンデミック以後、今年度は 3 年ぶりに再開した）など、教育分野への参入によって得られた体験についてお話を伺った。

【期待される成果】

上記の①～③について、下記の成果が期待される。

①各農家での農作業と農泊を実際に体験することで、安心院町の農産物の生産の様子や、地元の食材の活かし方を知ることができる。また農泊によって地元の方々からの農業・農泊への取り組みに対する思いを伺うことができる。加えて、滞在の中で、農村という場所ならではの地域資源の活用を実際に見ることで、グリーンツーリズムという観光形態がもつ可能性を知ることができる。

② 地元の人たちの取り組みや考えを伺うことで、グリーンツーリズムの実態をより深く理解することができる。また、安心院にどのように人を呼び込もうとしているのかを知ることができる。

③ 外国のグリーンツーリズム研修から取り入れたこと、また大きな経済効果が期待される訪日外国人に向けての取り組みについて知ることができる。

【研究旅行日程表】

出発予定日　　2022 年　8 月 21 日 帰着予定日　　2022 年　8 月 24 日	旅行予定日数（発着日を含む） 4 日間

	滞 在 地	行動・調査内容
第 1 日目	福岡→大分 安心院町	14:00「百年乃家ときえだ」(代表者：時枝仁子) →魚釣り体験・宿泊・農家の人との交流
第 2 日目	大分	午前中　朝食・漬物づくり 14:00「舟板　昔ばなしの家」(代表者：中山ミヤ子) →うどん作り体験(家の中)・宿泊・農家の人との交流
第 3 日目	大分	午前中　朝食 14:00「農村民泊　悠遊」(代表者：権藤のり子) →野菜の収穫体験・宿泊・農家の人との交流
第 4 日目	大分→福岡	午前中　東椎屋の滝・南光寺 仁王像を案内してもらう 視察研修(講話) →農泊の活動・ヨーロッパ研修・教育旅行についてお話をしていただいた。

◆ 1. 安心院町・農泊の 3 日間

ここからは、安心院町での農泊体験について述べたい。特に農泊の様子、地域資源を用いた料理、そして地域資源の観光への活用という 3 点を主題にしてまとめていく。

1 日目　「百年乃家ときえだ」(図 1)　代表：時枝仁子さん

11:00	安心院支所前に到着　三女神社・安心院家族旅行村まで観光
13:30	「百年乃家ときえだ」に到着
17:00	魚釣り
19:00	展望台・安心院温泉
20:00	夕食
21:30	就寝
7:00	朝食

※基本的にチエックインは 15 時頃～

百年乃家ときえだは明治 28 年に建てられた住宅で、家族で農村民泊を行っている。到着時刻が早すぎたため、大変迷惑をかけてしまったが、温かく迎えてくれ、そこにはお客さんを迎えるために掃除機をかけたり、片付けを行っていたりするお父さんとお母さんの姿があった。農泊は、農家の方のおうちにそのまま泊まるという認識しかなかったが、そこには、

対価が発生しているからこそ、きちんと準備をするという心構えがあると感じた。他にも受け入れ家庭では、料理や食中毒、最近ではコロナなどに気を配らなければならず、農泊が一つの仕事として成り立っているのだと分かった。[1]

農作業体験では、筆者が訪れたときは、日中は暑く、夏野菜作りもひと段落し、雑草をとっても、すぐに生えてくるため、午後からの魚釣りに変わった(図 2)。お父さんは、最近は釣りをしていなかったそうだが、前日にお孫さんと魚釣りをしたときに、意外と魚がいることに驚いたとおっしゃっていた。魚の減少の原因には、以前はいなかった鳥(カワウ/川鵜)が魚を食べてしまっている現状があるとのことだった。

次の日には、漬物づくり(図 3)とやせうまづくり(図 4)を体験した。漬物は野菜によって、塩の割合が異なるため、そのたびごとにきちんと量を計って作らなければならない。やせうまは、「お盆の送り日に仏壇にお供えして、先祖が乗って帰る」という言い伝えがある。「やせ」にはうすっぺらい、「うま」には長いという意味があるそうだ。やせうまは、粉をゆがいて、きなこをつけて食べる簡単なものだ。そのため、農作業・子育て・家事で働きづめの女性が、作るのにも適していた。

展望台は家族旅行村安心院から登って行ったところにあり、遠くの山々まで見渡すことができた。その途中には、安心院葡萄酒工房があり、ぶどうが生産されていた。

安心院町は西日本有数のぶどうの産地で、食用とワイン用のぶどうが栽培されている。ぶどうの周りには、イノシシ対策のための金網があった。ぶどうは水が少ないのもいけないが、多すぎると割れてしまい、そこから腐ってしまう。そのため、ぶどう畑の下は、一面草が生えており、水が上にいかないようにされており、水の調節に気を配っていることが分かった。

夕食は野菜を中心とした料理だった。自家製味噌を使っただんご汁やみとりまめを使った赤飯があった。体験で捕ったハエは南蛮漬けにしていただいた(図 5)。朝食では、お母さんが作った漬物があり、そのときにある食材を用いて、美味しい料理を作られていた(図 6)。調理はお母さんを中心としながらも、お父さんが配膳や片付けを手伝っている様子があり、家族で協力しながら、農泊を行っていると感じた。

コロナ以前は中国、台湾、上海の人なども含め、年間 500 人ほど宿泊していたが、コロナによって、お客さんの数は約 95%減少し、収入も減った。現在は、コロナ以前から行っていたパンやまんじゅう、漬物、季節のよもぎ、筍、栗を直売所(JA ふれあい市場、道の駅、スーパーの生産者コーナー)に販売して副収入としている。業者ではないため、大量には作れない。また、わざわざ買うことはせず、そのとき身近にあるものを加工して、暮らしを楽しみながら、副収入としているとおっしゃっていた。

---

[1] 宮田静一編『農泊のススメ』(弦書房 2020 年) 178～183 頁参照。

「自分の労を惜しまなければね、少しずつでも自分の商品が、時枝百年乃家、時枝さんの商品として独り歩きしてくれるんだから」とおっしゃっており、1 つ 1 つのものを丁寧に作り、お客さんに届けておられると分かった。

図 1：百年乃家ときえだ

図 2：魚釣り

図 3：漬物

図 4：やせうま

図 5：夕食
だんご汁、ハモのカツ、みとりまめ(赤飯)
川魚南蛮漬け、みょうが、ぶどう、メロンなど

図 6：朝食
漬物、みそ汁、卵焼き、魚、冷奴、
ヨーグルトとぶどうなど

(図 1～6)2022 年 8 月 21 日　筆者撮影

2 日目　「舟板昔ばなしの家」(図 7)　代表：中山ミヤ子さん

12:00	「舟板昔ばなしの家」に到着
13:00	うどんづくり体験
18:00	五右衛門風呂
19:00	夕食
22:00	就寝
9:00	朝食（お客さんに時間は合わせて作る）

この家は、代表の中山ミヤ子さんとその娘さんが手伝って農泊を行っている。

農作業体験としては、うどんづくり体験を行った。昔ながらのうどんづくりの機械(図 8)でうどんを作ることは、お客さんにとっても新鮮であり、面白そうにされているとのことだった。また、囲炉裏や、井戸(図 9)、五右衛門風呂(図 10)があり、昔話の中のようなのんびりした中にわくわくする雰囲気があった。

食事では、人気の鶏めしの他、鹿やイノシシの肉(図 11)を提供している。また、隣の院内町で生産量が日本一であるどじょうを唐揚げにしていただいた(図 12)。どじょうは綺麗な水の中でしか、生きられないため、一昨日の大雨で多くのどじょうが死んでしまったとおっしゃっていた。

外国人の方も来られるが、スマートフォンの翻訳機で大体言いたいことは分かるという。あるとき、外国人の方が何かを尋ねてきたが、雰囲気で洗濯する場所を探していることが分かったそうだ。言葉が通じなくても、農家の家庭とお客さんの距離が非常に近いことで、感じることができるものがあるのかもしれない。

図 7：舟板昔ばなしの家

図 8 ：うどんづくりの機械

図 9 ：井戸

図 10：五右衛門風呂

図 11：鶏めし・鹿やイノシシの肉
オクラ・ゴーヤの揚げ物、刺身など

図 12：どじょうの唐揚げ

（図 7～12） 2022 年 8 月 22 日筆者撮影

3 日目 「農村民泊 悠遊」(図 13) 代表：権藤のり子さん

12:00	「農村民泊 悠遊」に到着
16:30~17:00	農作業体験
17:00	妙見温泉
19:00	夕食
21:00	就寝

「農村民泊 悠遊」は、代表の権藤さんがおひとりで運営されている。これまでは、介護のお仕事をしながら、教育旅行で子供たちを受け入れてきた。空気清浄機を完備し、コロナへの対策もしっかりと行われていた。

食事の面では、アレルギーのことも考え、トマトと牛乳で作った赤いシチューが人気とのことだった。また、地元の人が作ったしいたけのことを教えてくださり、普段何気なく買っている野菜は作っている方の思いが込められていると感じた。このしいたけの戻し汁が、夕食のこんにゃくの味付けにも使われていた(図 14)。

体験では、野菜の収穫を手伝わせていただいた。畑には、たくさんの種類の農産物が植えられていた。雑草は取ってそのままにしておき、肥料にしていた。虫は必要な分しか食べないため、そのままにしておく、とおっしゃっており、自然に優しい栽培の仕方だと感じた。

今回の体験では、野菜の収穫の体験(図 15)だけでなく、野菜や畑に生えているものについて、いろいろと教えいただいた。例えば、ミントやドクダミ、匂いのある花(図 16)は、その匂いで虫や蛇が寄ってこなくなるそうだ。これはコンパニオンプランツという栽培の仕方になる(詳細は下記《補足説明》を参照)。

最近では、水耕栽培によって、コンピューターの管理の下、確実に野菜を作ることができるが、これを行ってしまうと、土のエネルギッシュさがなくなってしまうそうだ。今回は短い時間だったが、農作業体験を行うことは、発見の連続だと分かった。

《補足説明》

・コンパニオンプランツ

2 種類の植物が一緒に生育しているとき、相互に、あるいは一方がもう一方の生育を促進させるような関係にある植物同士を指す。

"コンパニオンプランツ (共栄植物) [ガーデニング] ", 情報・知識 imidas, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2022-10-04)

図 13： 農村民泊悠遊

図 14：夕食(赤いシチューとしいたけ煮物)煮込みハンバーグ、漬物、マカロニポテトサラダ、カボチャの煮込み

図 15：収穫したピーマンとオクラ

図 16；コンパニオンプランツの花

（図 13～16　2022 年 8 月 23 日筆者撮影）

地域資源と観光

1 日目に訪れたのが三女(さんみょ)神社(図 17)である。安心院町には所々に鳥居があり、南光寺の仁王像や、鏝絵（図 18・図 19・図 20）と併せて考えると、安心院町が栄えていたことがうかがえる。

安心院町は神仏習合の地であり、奈良時代頃から山岳信仰が八幡信仰や修験道と融合し、独特の山岳仏教文化が育まれてきたことから、鳥居や、仁王像はそれらの 1 部であると考えられる。

鏝絵は、左官が壁を塗る鏝で絵を描いたもので、漆喰装飾の一技法であり、安心院町を散策すると、所々で見かけることができる。安心院近辺に鏝絵が集中して作られたのは、腕のいい左官職人を輩出したことや、交通の要所となっていたことから、各町村との経済交流が盛んで、経済的に裕福な家庭が多かったためである。

東椎屋の滝(図 22)は、日本の滝百選にも選ばれた、迫力のある滝である。子ども連れのお客さんも楽しんでいる様子があった。今回は訪れることができなかったが、石橋も魅力的な観光地として人々が訪れているそうだ。

図 18：三女神社

図 19：鏝絵

図 20：鏝絵「鯛釣り恵比寿」

図 21：鏝絵「鶴と亀」

図 22：東椎屋の滝

(図 18：2022 年 8 月 21 日 筆者撮影)

(図 19～22：2022 年 8 月 24 日 筆者撮影)

◆　2. グリーンツーリズム・農泊とは

《補足説明》

・グリーンツーリズム

「もともとグリーンツーリズムは、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、オーストリア、スイスなどのヨーロッパ諸国で 1970 年代から広まった農山漁村地域でのツーリズムである。」[2]

農林水産省によると、グリーンツーリズムとは農村漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動のことである。[3]

・農泊

この言葉は、安心院町グリーンツーリズム研究会会長の宮田静一さんが個人の名前で商標登録をしている。なぜ個人の名前になったかというと、組織はいずれなくなるかもしれないが、個人はなくならないからとのことだった。

その後、2016 年(平成 18 年)1 月には、安心院町グリーンツーリズム研究会が農林水産省に「農泊」(NPO 法人安心院グリーンツーリズム研究会商標取得)という言葉の使用を認めた。それまでは、「農泊」ではなく、「民泊」という言葉を使っており、外国の人々は都市部の空いているマンション等の部屋に泊まることを「民泊」と思っていたため、誤解が生じることもあった。そこで安心院町グリーンツーリズム研究会が農林水産省の担当者に「農泊」を提案したのである。「農泊」という商標を国に買ってもらうことはできなかたので、国と共有することになった。[4]

【農泊の意味】

農泊には、日本国内の一般のお客さんだけでなく、訪日外国人や修学旅行生が訪れる。ここでは、農泊とはどのようなもので、そこで過ごすことで得ることができるものや、地域とのつながりを主題にしたい。

<u>安心院農泊者の内訳</u>

・年間 9000 人(10 年くらい前から)

→教育旅行(関東や広島など) 7000 人、大人 2000 人（韓国から 1000 人)、

その他：中国・台湾など

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、宿泊者数は大幅に減った。特に教育旅行からの収入が大きいため、修学旅行中止が響いたと思われる。

---

[2] 多方一成『グリーン・ツーリズムの文化経済学』(芙蓉書房出版 2000 年)10 頁より引用。

[3] 農林水産省農村振興局「グリーンツーリズムの現状について」（2006 年) 24 頁より引用。

[4] 宮田静一編『農泊のススメ』(弦書房 2020 年) 152 頁参照。

受け入れ家庭は多いときには 80 軒あったが、現在では 40~50 軒ほどとなっている。このうち、50 軒~60 軒は教育旅行をメインにしていたそうだ。韓国からの訪問客は実際に農業経営を行っている方で、研修旅行として来られていたそうだ。韓国でも農泊が行われていることが分かった。

安心院の農泊・「心のせんたく(洗濯)」

1. 一般の人

農泊というと、農作業をした後に、農家の方の家に泊まって過ごすというイメージがあった。しかし、著者が旅行に行った時期は、夏の終わりごろで、猛暑ということもあり、農家の方々も外での作業は早朝か夕方に行っているとのことだった。また、2 日目に宿泊した、「舟板昔ばなしの家」の中山ミヤ子さんは「ゆっくり食べて、ゆっくりしていいよ」とおっしゃってくれたため、ほとんどの時間をのんびりと過ごし、散歩に行くか、外の景色を眺めていた。どの家庭でも同じで、ここに来たら身体も心もゆっくり休める場所があると思った。

NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会会長の宮田静一さんは「教育旅行では、体験がないと、学校も来ない。だけど、大人の人にとっては農作業体験がハードルになっている。だから農作業体験は別料金にしている。」とおっしゃっていた。大人の人にとって、農泊は、親戚の家に帰って、のんびりする。何もないところで、何もせずに過ごすことが魅力だと感じた。

2. 教育旅行

中高生を対象にした教育旅行では、体験に来た子どもたちだけでなく、受け入れる家庭にとっても、楽しい時間であることが分かった。権藤のり子さんは、来てくれた子たちは、まっすぐで、先生たちは、「迷惑をかけていないか」と心配するが、全然そんなことはないとおっしゃっていた。様々な思いや事情を抱えている子たちが、京都や東京の観光地で遊ぶ修学旅行では得られない、農家の方との交流で、何かが変わっていく。学校側も受け入れ側も子どもたちもその変化を感じるからこそ、教育旅行として選ばれているのだと感じた。

宮田さんは、子どもたちが自分を肯定するために安心院に来ており、農泊は「家」でも「学校」でもない「第 3 の教育」だとおしゃっていた。

【日本と外国の休暇制度の違い】

前述したように、グリーンツーリズムは、西欧社会を発端としており、安心院町の活動もドイツのアッカレンに影響を受けてやってきた。ここでは、日本と外国での休暇やグリーンツーリズムに対する捉え方を主題にしたい。

ヨーロッパと日本の違い

ヨーロッパの人生観は、人生はバカンス、人生は楽しむものとされている。オーストリア、

ドイツなど先進国 37 カ国は、1970 年に制定された ILO(国際労働機関)132 号条約を批准している。この条約では、3 週間の有給休暇があり、そのうち 2 週間は連続での取得を定められている。

また、安心院町が目標としているドイツは、複数回に渡る戦争経験から国の政策の基本に農業を置いている。1973 年には、国の基本を農業とするドイツの第 2 次ブラント政権が「今後の農業政策は農村に住む人と農村に憩いと休養を求めに来るツーリズム政策とする」と国民に宣言していた。そのため、ドイツのアッカレン村の市長に「どれくらいの方がグリーンツーリズムに関わっていますか？」と質問したところ、「100%ですよ」と返されたそうだ。[5]

一方日本では、働き方改革が行われているものの、休みにくい環境がある。そんな中、宮田さんは、ILO132 号条約を批准するように呼び掛けている。

では、長期休暇を取ることができれば、グリーンツーリズムにどのような変化が起こるだろうか。

長期休暇による変化への考察

長期休暇による最大のメリットは、多くの人が休みをとれ、楽しく生きることができることだろう。そして、長い休みができれば、旅行に行こうと思うのではないだろうか。著者が考える長期休暇によるメリットは、地方旅行への選択肢の創造である。

観光客には、観光地に対して持っているバイアスがあると言われている。たとえば、千葉の家族が 2 泊 3 日で北海道か四国に旅行に行くことにしたとき、同じ移動距離や旅費でも、魅力的な観光資源が存在する地域の想起可能性が高くなり、心理的な距離が近くなる。[6]特に、短い休暇の場合には、限られた時間の中で目的地となる場所は、観光地へと絞られてしまい、地方への足は途絶えてしまうと考えられる。

長期休暇制度の取り入れは、人々の心にゆとりを持たせるとともに、観光客の目を観光地から地方へと向ける足掛かりとなるだろう。また、これにより、地方への関係人口の増加にもつながると考えられる。

◆ 3. 農村社会と女性

農村社会という環境の中で、農家の女性がどのような立場にいたのかについて、「農村民泊 悠遊」の権藤のり子さんとからお話を伺った。この権藤さんのお話と、講和での宮田会長のお話、さらに時枝さんに見せていただいた DVD[7](熊本県むらづくり課　制作・著作)の

---

[5] 宮田静一編『農泊のススメ』(弦書房 2020 年) 8～9、66 頁参照。

[6] 香川大学経済学部ツーリズム研究会『地域観光の文化と戦略』(リーブル出版、2010 年) 222 頁参照。

[7] この DVD は、くまもとふるさと応援ねっと事務局のホームページ「農泊先進事例調査レポートを作成しました！」で公開されている。同ホームページについては参考 URL

内容を踏まえて、安心院町でグリーンツーリズムが発展していった理由を考察する。

農村社会での女性の地位

権藤さんは、現在 79 歳で、最近までは介護福祉士として働いていた。農泊を始めたのは、年金をもらい始めてからとのことだった。権藤さんは、大阪出身で、44 年前に安心院に来られた。大阪では、タイピストの仕事をしており、当時の女性ではあまり考えられていなかった 1 人暮らしができるほどの収入があったそうだ。

安心院に来て驚いたことは、女性の社会的な地位だったという。女性は自分名義の口座をほとんど持っていなかったそうだ。

そのような中、1996 年に宮田静一さんが発足した「安心院町グリーンツーリズム研究会」によって、女性が代表となって農泊を行い、農泊で得た収入が女性名義の口座に入るようになった。この話を聞いて農泊をやってみようという人も増えたという。

「百年乃家ときえだ」では、おばちゃんが「農家が金をもらい他人を泊めるなんてとんでもない」と反対していたが、実際にやってみると、自分が作った料理を他人に初めて褒められたと、おばあちゃんが感動したとのことだった。また、時枝仁子さんは DVD の中で、「農泊は楽しくて儲かる。そして社会に貢献できる」とおっしゃっていた。女性の農泊への参加に対して、一部では、反対意見もあったが、比較的女性の方が積極的だったようだ。

考察

著者は研修旅行で農泊を体験する以前は、次のように考えていた。受け入れ家庭では、おもてなしの心[8]からお客さんに対して気を使いすぎてしまうのではないだろうか。その結果、農泊を行うことで、受け入れ側の心理的な負担が増え、疲れてしまうのではないか、と考えていたのである。しかしながら、今回お話を伺った方々は皆、農泊が楽しいとおっしゃっていた。

そこには、農村社会では、得られなかった女性の地位や達成感があると感じた。このグリーンツーリズムの活動が、農家の女性たちに農家とは違う新しい生き方を与えたと考える。

またグリーンツーリズムは暇と余裕が大切な資格であり、60 代が適齢期、70 代が円熟期だそうだ。[9]これが、農泊を楽しく続けていく上で重要な要素の一つなのではないかと思う。

2 日目にお伺いした中山ミヤ子さんのお宅では、娘さんが農泊を楽しいと感じ、続けていきたいとおっしゃっていた。このように、農泊は新しい世代へと受け継がれていくのではないかと思う。

の項目を参照。

[8] 東北産業活性化センター編『地域資源を生かす滞在型ビジネス』（日本地域社会研究所 2009 年）80 頁参照。

[9] 宮田静一編『農泊のススメ』（弦書房 2020 年）137 頁参照。

◆　おわりに

安心院町でのグリーンツーリズムの活動は、旅行者に新しい農村への旅行の提供や心のせんたくの機会を与えてくれた。それだけでなく、農家の女性にも新しい生き方を与えてくれ、町にも経済的な潤いを与えた。

農泊には、魅力がある。しかしながら、周りの人と話していても、グリーンツーリズムや農泊について知らない人が多い。また、現在、農業をする人が減少し、過疎化などが問題とされている中、これからの日本でのグリーンツーリズムの在り方を確立させていくためには、休暇制度などが一つの重要な要素になってくるだろう。

安心院町の美味しい料理、美しい自然は短い期間では、味わい尽くすことができない。長い休暇を使って滞在することで、その土地の良さを味わうことができると考える。

本研究を進めるにあたり、快くお話をしてくださった宮田静一さん、時枝仁子さん、中山ミヤ子さん、権藤のり子さんに厚く感謝申し上げます。

◆　**参考資料**

参考文献・資料

・多方一成『グリーン・ツーリズムの文化経済学』(芙蓉書房出版 2000 年)
・東北産業活性化センター編『地域資源を生かす滞在型ビジネス』(日本地域社会研究所 2009 年)
・宮田静一編『農泊のススメ』(弦書房 2020 年)

参考 URL

・安心院のこて絵情報です
http://www.ajimukk.com/kotee/index.html　(最終アクセス：2022/9/7)
・安心院(あじむ)の農泊｜大分県宇佐市｜農村民泊>安心院町>場所
https://www.ajimu-ngt.jp/ngt/basho/　(最終アクセス：2022/9/7)
・農泊先進事例調査レポートを作成しました！
https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiji003115/index.html (最終アクセス：2022/9/5)
・農林水産省農村振興局「グリーンツーリズムの現状について」(2006 年)
https://www.maff.go.jp/j/study/tisan_tisyo/h18_01/pdf/data7.pdf
(最終アクセス:2022/9/5)
・研究会の歴史-NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会
http://www.ajimu-gt.jp/page0118.html (最終アクセス:2022/10/16)